修士論文
2008 年 8 月

高齢夫婦の結婚満足度に関連する要因

指導　長田久雄　教授

国際学研究科
老年学専攻
20641620
日下倫子

目次

第１章　　はじめに　…… 1
1　結婚満足について…… 1
2　長寿化による「空の巣期」の伸長…… 2
3　熟年離婚の増加が高齢者に及ぼす影響…… 3
4　意義と目的…… 4

第２章　高齢夫婦の結婚満足度に関する研究…… 5
1　目的…… 5
2　方法…… 6
3　結果…… 7
4　事例と考察…… 9

第３章　総合的考察…… 18
1　Research Questions の検証…… 18

2　考察…… 19

3　今後の課題…… 21

謝辞…… 21
文献

要旨
１　目的：本研究では、高齢者夫婦自身でコントロール可能な結婚満足要因を探索する。双方の結婚満足度が高い夫婦は、お互いの情緒的機能が高いため、今後の老後生活においてお互いを主要なサポート資源とみなすことができる。不本意な家庭内離婚や熟年離婚を体験することなく高齢夫婦が結婚を継続するためには、高い結婚満足を維持することが必要である。結婚満足とは配偶者との対人関係であり「配偶者との相互関係を良好に保つ」ことが前提と考えられる。
Research Questions
(1)呼称と結婚満足度に関連はあるか、
(2) 朝の挨拶と結婚満足度に関連はあるか、
(3) エゴグラムと結婚満足度に関連はあるか、
(4) 不満要因は何か、
(5)孤独感とうつ状態は結婚満足度に関連するか、
(6)先行研究の結婚満足要因はサポートされるか
2　方法：一方か双方が 65 歳以上で、同居家族がいない地域在住の空の巣期夫婦を対象とし、調査票記入と個別の聞き取りを兼ねた対面インタヴューを行った。19 人の調査を行ったが、そのうち、8 組 16 人のデータを分析対象とした。調査期間は 2008 年 3 月から 7 月であった。質問内容は、
① 結婚満足度尺度（袖井 1984)、
② エゴグラム・チェックリスト TEG2、
③ AOK 孤独感尺度（安藤ら 2000)、
④ GDS 短縮版（矢冨 1994)、
⑤ 基本情報（性別、年齢、結婚継年数、健康感、家計状況、子の有無、介護の有無)、
⑥ 呼称に関する質問、朝の挨拶に関する質問、不満要因に関する質問であった。
3 結果：結婚満足度は、夫も妻も 13 点から 26 点であった。夫群と妻群の結婚満足度を比較すると、妻群の平均点が夫群の平均点より高かった。夫の結婚満足が妻より高いカップルは１組、同点のカップルは１組、夫の結婚満足が妻より低いカップルは６組（75%）であった。
4 考察:Research Questions の検証
(1)呼称と結婚満足に直接の関連は観察されず、お互いへの確固たる信頼があれば、何と呼ばれても感情を害することはないことが分かった。
(2)朝の挨拶と結婚満足には直接の関連はなく、会話の導入としての機能も限定的であることが判明した。対象夫婦のコミュニケーションは、非言語メッセージによる以心伝心が含まれていた
(3) エゴグラムと結婚満足の直接の関連は見いだせなかった。エゴグラムのパターンが夫婦の相性を決定するのではなく、一方の言動が相手にどういう反応を呼ぶかは各カップルや場面によって異なることが確認された。
(4)妻から夫への不満は「主婦の領域に夫が口出しをする」一件であった。
(5)孤独感、うつ尺度ともに、直接には結婚満足と関連しなかった。
(6)サポートしたのは結果は家計項目（収入が高いほど結婚満足が高い）だけであり、性

差（夫高妻低）と就労項目（双方が不就労で結婚満足が高い）では先行研究と矛盾する結果となった。健康と介護項目に関しては、明確な関連は見られなかった。結婚満足が『妻高夫低』と逆転したため、他の要因との関連が先行研究と一致しないことは不思議ではない。

4 総合的考察：「高齢者夫婦が自分たちでコントロール可能」な結婚満足要因を発見することはできなかった理由として、対象の妻たちは、(1) 世代的な要因もあって従来型の夫婦観を持っていたため夫唱婦随、女は家庭の意識が強かったこと、(2) 夫から十分のケアーを受け取っていたこと、(3)専業主婦であったため、フェミニズムの影響を受けていないことから、結婚への不満が少なかったことを推察する。『妻高夫低』を始め先行研究と矛盾する結果が出た理由は、(1) サンプル数が 8 組 16 人と少なかったこと、(2)対象が筆者の縁故募集であったため、selection bias が影響していると考えられる。以上の理由から今回の結果を一般化することは困難である。今後は、多数のサンプルに対し、生育環境による違い、世代による違い、地域文化による違いなどを加えた調査が必要であろう。

キーワード：結婚満足、夫婦関係、定年後、空の巣期、

主要文献

朝日生命保険,2003,シニア世代生活意識調査 2003, 熟年シニアの暮らしと生活意識データ集,2004,生活情報センター

Dusay,J,1977,Egograms,Harper & Row（新里里春訳,2000,エゴグラム,創元社,東京）

土居健郎, 2001, 続「甘え」の構造, 弘文堂, 東京

藤崎宏子,1998, 高齢者・家族・社会的ネットワーク, 培風館, 東京,

Harper, J et al., Daily Hassles, Intimacy, and Marital Quality in Later Life Marriages, The American Journal of Family Therapy, Jan-Mar 2000, 29,01-18

平木典子, 2004, 夫婦の愛が不安的になる時, 発達 100, vol. 25, p47-53

平山順子ら, 2001, 中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻とは異なるのか？発達心理学研究, 12-3, p216-227

平山順子, 2003, 家族をケアするということ, 柏木恵子・高橋恵子編, 心理学とジェンダー, p58-63, 有斐閣, 東京

稲葉昭英, 2004, 「夫婦関係の発達的変化」渡辺秀樹ほか編『現代家族の構造と変容：東京大学出版会, 東京, 261-275

池田政子・伊藤裕子・相良順子, 2005, 夫婦関係満足度にみるジェンダー差の分析, 家族心理学研究 2, p116-127

神原文子, 1995, 現代の結婚と夫婦関係, 培風館, 東京

柏木恵子, 2004, すれちがう夫と妻, 2004, 発達 100, vol 25, p38-46

柏木恵子, 2003, 家族心理学,　東京大学出版界, 東京

木下英二, 2004, 結婚満足度を規定するもの, 渡辺秀樹ほか編, 現代家族の構造と変容, 東京大学出版会, p277-291

Lee, Gary R.1988, Marital Satisfaction in Later Life, Journal of Marriage and the Family, Aug 1998, 50,3, p775-783

諸井克英, 2003, 家庭内労働の衡平性-,柏木恵子・高橋恵子編, 心理学とジェンダー, p53-63, 有斐閣, 東京

永井暁子, 2005, 結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化, 季刊家計経済研究, 66, p76-81

長津美代子, 2007, 中年期における夫婦関係の研究, 日本評論社, 東京

直井道子, 2004, 高齢者の生きがいと家族, 長寿社会開発センター編,生きがい研究 10, p20-40

長田久雄,高齢者の人格・感情・欲求への配慮 2003,柴田博・長田久雄編,老いのこころを知る,p71-82,ぎょうせい,東京

Rauer, A. et al., 2005, the role of husbands' and wives' emotional expressivity in the marital relationship, sex roles, 52, 9/10, may 2005, 577-587

下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・石原治・権藤恭之, 1995, 中高年期におけるライフイフイベンとその影響に関する心理学的研究,老年社会科,17-1, p40-56

袖井孝子,1999,老年期の夫婦関係,折茂肇編：新老年学,p1429-1448,平凡社,東京

Stinett,N et al., 1979, Marital need satisfaction of older husbands and wives, JMF, 32,428-434

東京大学心療内科 TEG 研究会,2006,TEG2 解説とエゴグラム・パターン,金子書房,東京

東京ガス都市生活研究所,生活レシピ 2004, 熟年シニアの暮らしと生活意識データ集,2004 年版,生活情報センター

都筑佳代, 1984, 定年退職後夫婦の伴侶性, 老年社会科学, 62, p76-90

吉岡久美子　2001, 高齢者のエゴグラム・プロフィールの特徴と心理的援助に関する探索的研究, 健康心理研究/日本健康心理学会編